

事例報告：特別展「トーテムの物語：北西海岸インディアンのくらしと美」における協力

著者	齋藤 玲子
図書名	北太平洋の文化：北方地域の博物館と民族文化. 北海道立北方民族博物館編.(北方民族文化シンポジウム報告書, 第23回)
開始ページ	25
終了ページ	28
出版年月日	2009-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009334

＜事例報告＞ 特別展「トーテムの物語
～北西海岸インディアンのくらしと美～」における協力

齋藤 玲子

(北海道立北方民族博物館)

＜Case Report＞ Collaboration on the Temporary Exhibition
“Totem Story: Life and Art of the Northwest Coast Indians”

Reiko SAITO

(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

Our recent temporary exhibition on the theme of the Northwest Coast Indians culture also focuses on their activities of modern art. Since 2007, I have been involved in a joint research for the Canadian indigenous print collection of the National Museum of Ethnology. For the accomplishments of this research we show about 40 silk-screen prints and had a forum on the Northwest Coast Indians art in our museum. Furthermore, we had a co-hosted exhibit of these prints in the Abashiri Municipal Art Museum. Besides, the comments on their own work submitted from three native artists give better messages to visitors.

キーワード：特別展、協力、共同研究、アーティスト

Key Words : Temporary Exhibition, Collaboration, Joint Research, Artist

はじめに

本シンポジウムでは、一昨年以來、当館学芸員が主に展示に関する「事例報告」を行なってきた。開催中の特別展をご覧いただく前段として、その趣旨や経過について、他館との協力事項を中心に報告する。

当館では、常設展示以外の短期の展示として、夏季(7月中旬～10月中旬)の特別展と、冬(2～3月)の企画展、その合間の春、秋に2、3回のロビー展を行なっている。これらの展示は規模、特に予算が違う。特別展の観覧料は中学生以下を除くと有料であるため、基本的に当館の収蔵資料のみならず他館から資料を借用し、狭いながらも特別展示室のスペースを最大限使って、資料も数多く展示する。広報用のポスター・チラシ、および展示資料の図版や解説を掲載した図録を作成する。さらに、会期中には、関連する内容の講座や講習会等をひと月に1、2回程度開催するなど、特別展は年間行事、特に年度前半の核となるものである。特別展以外の展示は基本的に観覧無料で、比較的に低予算で行なっている。

テーマとその計画について

特別展のテーマは、近年は4年連続で計画を立て、進めてきている。たとえば、平成14～17年度は、北方民族の主な生業について、初めに狩猟、次に漁労と海獣猟、

3年目に遊牧、最後に植物採集をテーマに展示を行なった。現在は平成18年度から「環北太平洋の文化」を共通テーマに、初回は北東シベリアのコリヤークに焦点を当て、昨年はベーリング海地域にくらす諸民族を取り上げ、今年は北アメリカの北西海岸地域を対象とした。来年は、オホーツク海を含む、北海道近辺の文化が中心となる予定で、地域を変えて、4年間で北太平洋を一巡する。

中期的なテーマを設定する理由はいくつかあるが、第一には資料や情報の蓄積のためである。特別展を開催するにあたり、その分野の資料調査を行ない、研究状況を把握し、成果をまとめて「図録」という形で残すことは、博物館にとって大切な情報の蓄積になり、職員にとっても勉強になる。「生業」も「環北太平洋」というテーマも、北方の諸民族をより深く理解するために重要で、今、当館がなすべき調査研究であり、資料や情報の収集・公開とともに、保存・継承していくべき分野と考えた訳である。

当館には、日頃さまざまな質問・問い合わせがある。特別展の図録は、そのテーマの概要を紹介するのみならず、図版も多く、文献リストも付しているの、担当者以外でも、問い合わせの対応に活用できる。こうした蓄積は大事なこととである。もちろん、北方民族の歴史や文化などに関心を持ってくださる方々、観覧者にとって

も、連続したテーマで展示を行い、図録を発行することが、有用なものであってほしいと願っている。

また、早くから計画を立てておくことは、準備のうえで大切である。特別展は、当館の資料とスタッフだけではとうてい実施できず、他の機関や研究者等との協力関係を築きながら準備を進める必要がある。博物館関係者にとっては当然のことだが、博物館から資料を借用するには、事前の打ち合わせを繰り返す。多数の資料や大きなものを借りるには、半年から1年くらい前には交渉をはじめ、3か月くらい前には資料を確定する。印刷物を作るためにも、そのくらいの準備期間が必要である。詳細が固まり、資料や情報・原稿などが集まってくる直前の3か月くらいに仕事は集中するが、構想に十分な時間があるのは大事なことである。

開催中の特別展について

さて、平成20年度の特別展では、東南アラスカからブリティッシュ・コロンビア州、ワシントン州あたりまでの北アメリカ北西海岸地域にくらす北西海岸インディアンと総称される人びとの文化を紹介した。

当館では、これまでも北西海岸インディアンの資料を比較的多く展示してきた。常設展では儀礼具を中心に80点ほどを展示しており、これは、イヌイト、アイヌに次いで多い数である。また、平成12(2000)年に開催した第15回特別展「トーテムポールとサケの人びと ～北西海岸インディアンの森と海の世界」では、その生業と精神文化に焦点を当てた。他にも、特別展や企画展で北西海岸インディアンを含む展示を行ってきた。

ゆえに、今回は、連続テーマである北太平洋という環境のつながりを意識しながらも、常設展や以前の特別展とは別の視点で、北西海岸インディアン文化を紹介しようと考えた。その切り口は、芸術を中心とした現代の文化活動である。



特別展入口

展示の構成は、大きく3つに分かれており、伝統的な生活、次に精神文化および儀礼、最後に現代の文化の紹介をしている。伝統的な生活では、海への適応として漁労をはじめとする生業や、船、食生活、また樹木の利用

に関する資料等を展示した。精神文化については、仮面や儀礼具を中心に、トーテムや独特のデザインの原点となっている世界観について理解してもらえるよう努めた。そして、現代の文化については、シルクスクリーン版画を中心に、文化復興や観光に関することなども紹介した。

国立民族学博物館の共同研究

平成19(2007)年度に、国立民族学博物館(大阪府吹田市/通称:民博)の共同研究として、研究課題「カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題」(筆者代表)が採択され、21年度末までの予定で研究を進めている。民博には、1970年代から80年代にかけて収集された北西海岸インディアンのシルクスクリーン版画が700点近く、イヌイトの版画が400点近くある。これらの収集の中心となった小谷凱宣氏(名古屋大学名誉教授)から、かつてより整理・活用への期待を聞いており、気になる資料であった。

そこで、今回の特別展で展示することも目的の一つとして、民博所蔵資料の再評価をするとともに、版画が先住民および先住民をとりまく社会に与えた影響等について研究してみたいと考えた。民博で北米先住民を専門としている岸上伸啓教授に相談したところ、折しも平成21(2009)年にカナダ先住民の特別展示を行なう計画があり、好機とのことで、共同研究の窓口になっていただいた。

実は、カナダの先住民文化については、平成14～17(2002～05)年度にかけて、本多俊和(スチュアート ヘンリ)放送大教授代表の科学研究費によるグループ研究に加えていただき、北西海岸インディアンをはじめとする先住民(First Nations)文化を展示するブリティッシュ・コロンビア州およびカナダ首都圏の博物館の現状を調査したことがある(そのとき、今回参加していただいているUBC人類学博物館のJill Bairdさんにお会いした)。共同研究では、小谷先生、スチュアート先生はもちろん、北西海岸インディアン、イヌイト両方の芸術について詳しい大阪大学の太村敬一准教授をはじめ、15人の研究者らの協力を得ながら、研究を続けている。



公開研究会の様子

今回の特別展では、民博から借用したものを中心にシルクスクリーン版画40点あまりを展示した。そして、特別展の初日には、研究会のメンバーである版画家の田主誠先生の指導の下、ペーパークラフトで仮面をつくるワークショップ開催した。さらに翌日には、研究会のメンバーによる「北西海岸インディアンのアート」と題する公開研究会も開催した。

市立美術館とのタイアップ

また、会期中の8月2日から31日には、網走市立美術館との共催で、同館でも民博所蔵の北西海岸インディアンの版画の展示を行なった。市立美術館の学芸員・古道谷朝生氏が北西海岸インディアンのデザインに関心をもっていたことを知っていたので、前年から企画を持ちかけていた。

当館の特別展では、その趣旨から版画のみの展示ということにはならず、スペースの制約からも多数を展示することはかなわない。そこで、美術館でゆったりと作品を見てもらうこと、および博物館と美術館の互いの来館者や関係者らに、関心を持ってもらう機会にしたいとの考えから、計画をした。資料搬送の際は、両館の借用分を同一の業者で美術梱包・輸送することで、経費を節約した。

展示の準備段階では、美術館の古道谷学芸員に版画の額装をしていただいた。一方、美術館の展示では、筆者が北西海岸インディアンに関する概説パネルの文章を書き、現地のトーテムポールなどの写真を提供した。

当館および市立美術館のいずれかの展示を見ると、もう一方の展示の観覧料が割引になるという取り組みも行った。

また、展示期間中に、古道谷学芸員には、当館で子供向けのシルクスクリーン版画制作の講習会を指導していただき、筆者は美術館で解説会を行なった。

市立美術館とこうした緊密な協力事業を行なったのは、初めてのことである。



市立美術館の展示の様子

アーティストからのメッセージ

他館との協力について述べてきたが、当館の収集資料

とそれらの製作者についても報告したい。

開館前年の平成2(1990)年、常設展示のためにトーテムポールとカヌーが制作された。しかし当時、北西海岸のアーティストの情報をほとんど持っていなかったため、北米の先住民アート等の輸入を手がけていた日本の商社を通して、アメリカの美術商関係者の手配で、アラスカに住むトリンギットの若手のアーティストが制作したものを購入した。トーテムポールを彫刻したアーティストの名前(Wayne Price氏)はわかっていたが、その後、彼とは特に連絡をとらずにいた。

平成19(2007)年、筆者はアンカレッジのAlaska Native Heritage Centerに行き、Price氏がカヌーを復元した様子を収めたビデオと本があることを知った。その映像は、正式な手続きを経て購入し、一部を編集して特別展でも上映した。そして、Price氏にも連絡をしたところ、確かに日本の博物館向けにトーテムポールとカヌーを作ったが、展示は見えていないとの返事があり、写真を送ると、大変喜んでくれた。彼の近年の作品も収集したいと思い、ダンス用の櫛や版画、銀細工など小さなものではあるが、平成19年度に数点を購入した。

また、筆者は10年前、アラスカ南部のメトラカトラというツィムシヤンの村に調査に行った。北海道東海大学教授(当時)岡田淳子氏が代表の科学研究費の研究協力者として、調査の機会をいただいたのである。

このとき、メトラカトラで美術の教員として、またアーティストとして活躍するJack Hudson氏に会った。その後、彼の版画数点を博物館で購入した。平成19年、久しぶりにメトラカトラを訪問してHudson氏と再会し、近隣のケチカン在住のトリンギットのアーティストNorman Jackson氏を紹介してもらい、会ってきた。Jackson氏の版画も2点のみだが、同年度に収集した。

こうして平成19年度に作品を購入したアーティストたちに、特別展に際し、作品に対するコメント等を寄せて欲しいと依頼した。会期中からではあったが、それをパネルにして、追加展示した。これらは観覧者への解説とメッセージであるとともに、資料情報としても重要なものであると考えている。

<p>"Koots Tana'a" - Bear holding copper shield is Tlingit's most prized art work. A copper shield was like money in the old days and was used for trading and as status.</p>	<p>『フーツ・タナア』クマが抱えている銅板紋章は、トリンギットが最も誇りとする作品である。銅板紋章は往時の貨幣のようなもので、交易に用い、ステータスを示すものであった。</p>
<p>"Together" - Killer whale is a clan crest. In this art work, transforming into human being from killer whale. A salmon is shown to be ready to spawn to continue a new cycle of life, and hawk man on the back of the killer whale signifies any and all good luck in life. Everything works together in this world.</p>	<p>『共に』のシャチは氏族の紋章である。この作品には、シャチから人間への変身が描かれている(昔、人間と動物は自由自在に姿を変えることができる)と信じられていた)。サケは生命の新たなサイクルを存続させる運命を迎えており、シャチの背にいるホーク・マン(タカ・人間)は人生のあらゆる幸運を表している。全てのものは、この世界で共に働いているのだ。</p>
<p>Also, thank you for your invitation to your wonderful show.</p>	<p>最後に、素敵なお展示に参加できたことに感謝します。</p>
<p>Norman G. Jackson</p>	<p>ノーマン G. ジャクソン</p> <p>制作主人のジャクソン 湯島裕子氏による写真</p> <p>※『共に』は反対側の壁面に展示しています "Together" is displayed opposite side.</p>

N. Jackson氏によるコメントのパネル

おわりに

当館は、展示のための予算も設備も(都道府県立の博物館としては)小規模であり、しかも海外の先住民族文化を対象としている博物館でありながら、学芸員がなかなか現地に行くことができない。そのような状況のもと、他の機関や関係者らの理解と協力を得なければ、展示をはじめとする博物館活動はままならない。

これまでのシンポジウムでも報告・討論されてきたように、先住民族文化の展示においては、展示される側の理解と協力を得ながら進めることが理想であり、前提となりつつある。しかし、さまざまな制約の中で、特に海外在住のさまざまな立場の複数の関係者らと対等に協力しあい、展示の企画から実施まで完全に携わっていただくことは、困難だといわざるを得ない。だからといって、手をこまねいているのではなく、できることから始めてみたのが、報告した内容である。小さな試行でも、やってみて改善をするという積み重ねを続けたいと思っている。

良い点ばかりを述べているようだが、反省点も多々ある。観覧者数も、近年の特別展と比べてやや減少している。その理由については、展示内容の評価等と合わせて、これから分析せねばならない。



職員によるトーテムポールの移動作業

最後に、この特別展をご覧になった共同研究のメンバー、国立民族学博物館の関係者から、次のような感想をいただいた。トーテム・ポールを常設展示室から特別展示室に移す作業を、職員で行なったということに驚き、考えさせられた、というのである。ただ単に予算が

ないので、自分たちの手で行なったというだけなのだが、改めて考えることは、他の機関や人たちとの協力のみならず、当然のことながら、博物館内の協力が大切だということである。以上で報告は終了する。関係者各位に感謝する次第である。

主な参考文献

小谷凱宣

- 1992 「シルクスクリーンに表現されるもの」加藤泰健ほか編『アメリカ大陸の文様(世界の文様5)』東京：小学館

齋藤玲子

- 2008a 「〈資料紹介〉北海道立北方民族博物館所蔵の北西海岸インディアンの版画について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』17: 73-82
- 2008b 「アラスカ・ツィムシヤンの観光開発と文化復興」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』(みんぱく実践人類学シリーズ4) pp. 221-246 東京：明石書店

北海道立北方民族博物館編

- 2008 『23回特別展示図録 トーテムの物語 ～ 北西海岸インディアンのくらしと美』網走